

「震災遺構検討会議 (旧門脇小学校校舎)」の結果概要

平成29年3月30日

旧門脇小学校校舎に関する
震災遺構検討会議(第5回)資料

震災遺構検討会議の議題

第1回

- (1)「震災遺構検討会議」の役割・スケジュール
- (2)「震災遺構整備計画」の枠組み(案)
- (3)旧門脇小学校校舎の現況と震災遺構整備等に関する各種情報
- (4)震災遺構整備等に関する意見・意向

第2回

- (1)第1回「震災遺構検討会議(旧門脇小学校校舎)」を振り返る
- (2)現地視察結果を確認・共有する
- (3)旧門脇小学校校舎の現況と震災遺構整備等に関する情報を共有する
- (4)会議の進め方とスケジュールを確認・共有する
- (5)震災遺構(旧門脇小学校校舎)整備等に関して協議する

第3回

- (1)これまでの「震災遺構検討会議(旧門脇小学校校舎)」を振り返る
- (2)震災遺構(旧門脇小学校校舎)の整備に関して協議する
- (3)東北大学建築空間学研究室「石巻震災伝承・遺構デザイン検討資料」の説明

第4回

- (1)これまでの「震災遺構検討会議(旧門脇小学校校舎)」を振り返る
- (2)震災遺構(旧門脇小学校校舎)の整備等に関して協議する
- (3)その他

意見の振り返り

第1回

- ・意見は、「遺構の活用の仕方」、「校舎の残し方」に関するものが多く、その他に「管理の仕方」や「移設費用」などに関する意見が出された。

第2回

- ・意見は、「新しい施設の提案」、「何を伝えるのか」、「体育館の活用」に関するものが多く、その他に「周辺施設との連携」、「遺構の見せ方」に関する意見が出された。

第3回

・意見は、「規模・範囲」「新しい施設の提案」「既存施設の活用」「南浜地区との連携」「他施設との連携」に関するものが多く、その他に「検討のあり方」「残す際に必要な配慮」「展示内容」などに関する意見が出された。

第4回

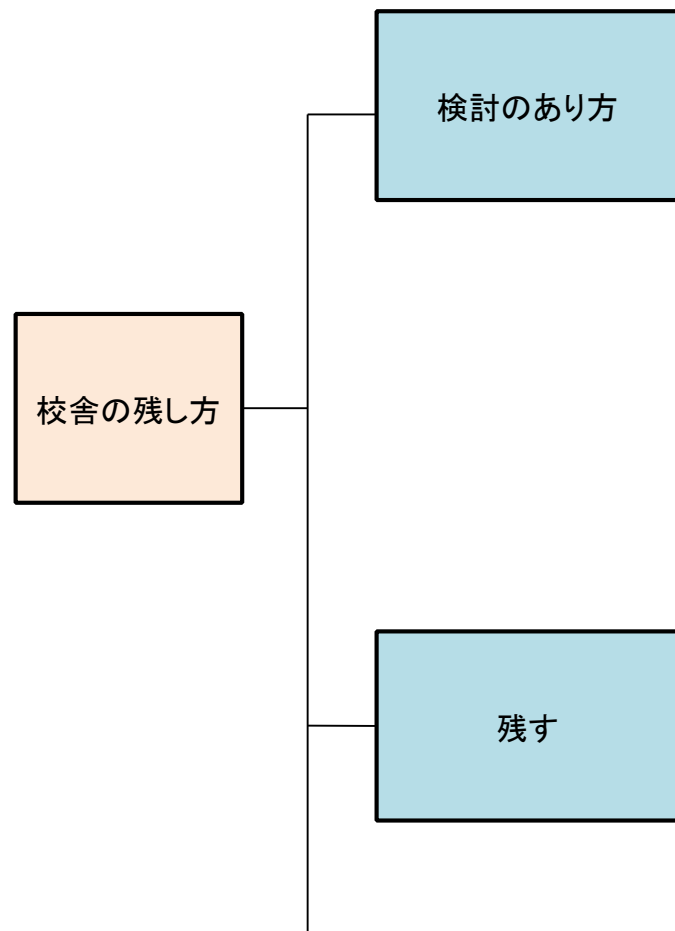
・意見は、「校舎の内部の公開あり」「校舎の内部公開なし」、「特別教室棟」、「体育館の利用の仕方」や「校庭を含めた敷地の利用の仕方」に関するものが多く

また、「残す際に必要な配慮」「規模・範囲」「他施設との連携」などに関する意見が出された。

意見の分類

1. 校舎の残し方
2. 遺構の活用の仕方
3. 遺構の見せ方
4. 管理の仕方
5. 費用について
6. スケジュール

1. 校舎の残し方



あのまま門小のあの地に遺構として残すのか、又、別に移設して門小全体の敷地を有効使用できないものか新たな提案として真剣に考える	震災直後のまま残された門脇小校舎内について「公開活用の是非」、「どのように見てもらうか」を具体的に検討する	門脇小校舎内部を、実体験や教訓とセットで参加者で見学し、その意義を参加者で再考する
一部保存・部分保存に関する、お互いの知恵を出し合う	みんなが校舎に対してどう感じ、どう受け止めているのか、共有し話し合う	「遺したい」と思う気持ちだけではなく「何のために遺す」を明確にする
遺構を見ると津波を思い出し辛いという気持ちは無視できるものではないが、30年後、50年後、100年後に初めて石巻を訪れた方々へ伝えるということを一番に考える	単に「ここをこういう風に整備します」「ここに碑をおきます」ではなく、「こう伝えたいからこの部分を残す」「この教訓を伝えたいから、この見せ方にしよう」という風に、機能と設備を対にして検討する	
何を指すかを決めて、議論を進める	検討会議メンバーで「何を伝える為に残すのか」の共通認識を持つ	5年後には新しい技術が出る可能性があるため急いで壊さず、話し合いを続ける。
校舎正面の痕跡が風化しているため、痕跡を復元するのか共通認識を持って議論する。		
目で見る訴え方が少なくなってきた被災地で、来訪者に目で見て感じてもらうためには、最もインパクトがある校舎を今ある状態で見てもらう	200軒以上焼けた門脇大火が、50年後震災被災者がいない世の中になった時でも後世に伝わるように、門小を公園に移転せず、痕跡を残す	広島と神戸を比較すると、遺構が多く残っている方が人々の関心が高く、多くの人の来訪に繋がっている様に感じたので、遺構を多く残す
石巻ではほとんどの場所が津波被害を受けているので、広範囲にわたって震災遺構を遺す	全国や全世界中の人々から支援を受けた恩返しに、被害の現状を後世に残す	校舎を「津波大火遺構」として、国の文化財指定を受ける
「津波大火」の門小校舎は、現地保存する	観光で沢山の人が訪れる場所に震災遺構を残す	残すのならば、早急な決断をして、現状維持を行う

校舎の残し方

残す

目で見えて分かる存在としての門小の被災状態を伝えられるように残す	残せるものは全て残す	校舎を残す
ケースA～Cの3パターンを残し方を検討する	建物の損傷状況、維持管理費等を考えると、現地での一部保存がベター	保存範囲の決定と計画実現性を確認する
そのままが門小の価値	一部二階までなど部分的に残す	

残さない

校舎の中に入って見学したくない人に配慮する	後世に負の財産を残さないために、全部解体をする
-----------------------	-------------------------

残す際に必要な対策

構造的な耐久性を確認する	コンクリートの劣化状況を確認する	耐震補強を行い、校舎内部に入り中を見せる
法的な課題について検討する		

校舎の残し方

残す際に必要な配慮

近隣住民と外部の方の両方の感情面を配慮した形で保存する	門脇の方に迷惑にならないようにする。	住む方に意見を聞き、配慮する。
遺構として保存するには、地区住民の理解と協力が必要	建築基準法や構造的なことも追加する。	震災遺構になるのだから周囲の賛成が必要。
教室などの被災状況を記録・保存する	中に入らなくても思いを馳せられるようにする	思い出を遺構へつなげる
残すなら最小限とし、新しく暮らす人の妨げにならないように配慮する		

規模・範囲

小さい規模で残して伝える	最小限の規模で残す	現地確認のできる程度の規模でよい	学校の敷地範囲全てを残す
復興住宅に圧倒感があり、門小を小さく残すのでは残す意味がないため、大きく残して保存活用をする	震災遺構に至った評価項目を改めて精査し、部分保存でも最大限残せるよう協議して集約する	後世の人達の為にも残すという勇気を持ち、出来る限り現状のままの保存を検討する	
コンパクトに保存する方が維持管理も容易で費用も少なくて済む	震災の悲惨さ等を伝える為に、出来る限り現状のまま保存する	正面玄関・含む1階・3階の二教室程度	2、3階の火災は3次的なものであり、不必要
津波の威力・門小の火災状況を、出来れば大きく保存する	残すなら全部残す	特別の許可で入れる余地を残す為に全部凍結保存し、ダメな場合は解体する	中心を残す一部保存にし、いたずらが心配なので中へ入らせない
残置が一番お金が掛からないのであれば全体残したい			

校舎の残し方

規模・範囲

<p>神戸の橋桁の遺構からは正直あまり伝わってくるものはなく、お金をかけて「一部保存」しても、「後世に伝える」という目的は十分に達することはできない</p>		<p>火災で黒焦げになった部分、火も水も来ずそのまま残っている部分のどちらも重要な価値がある。避難した窓も解説を聞きながら見て、強い印象を受けた。現場がこうして残っているからである</p>
<p>公営住宅とのボリューム感を考慮し、残す規模を決める</p>	<p>ケースAの壁だけでも充分</p>	<p>残したい形を掘り下げる</p>
<p>正面玄関～校長室までの1～2階を残して、建屋で囲う</p>	<p>津波が到達した場所と火災があった場所を残す</p>	<p>1階から3階までの被災の様子を残す。</p>
<p>早めに残し方を詰める(周辺の状況が変化すると考え方が変わるため)</p>	<p>残せる部分で残す規模を決める</p>	<p>燃えたところを部分保存する。燃えていないところは地域で使う</p>
<p>全面凍結のコストがかからないなら校舎全体を保存する</p>	<p>観察できる範囲を正面玄関とその東側教室の1階・2階部分と2階階段踊り場より避難した部分を残す</p>	

新しい施設の提案

<p>伝えるために新しく作る</p>	<p>市民活動を入れる器を作る</p>	<p>部分保存し施設を新設する</p>
<p>資料館や研修センターを計画する</p>	<p>他の施設を使用し伝える場を作る</p>	<p>特別教室の利用を検討する</p>
<p>新しい施設で伝える</p>	<p>まちづくりの施設計画と一緒に検討する</p>	<p>映像や写真でその時の状況を見られるものを整備する</p>
<p>保育所・幼稚園の分校の設立又は小中学の一貫校の設立</p>	<p>地元の町名(門脇町、九軒町、後町、浜横町、山崎、南地)を記したセンターを設置する</p>	<p>新しい施設を作ることで自らの思い出を繋げていく</p>

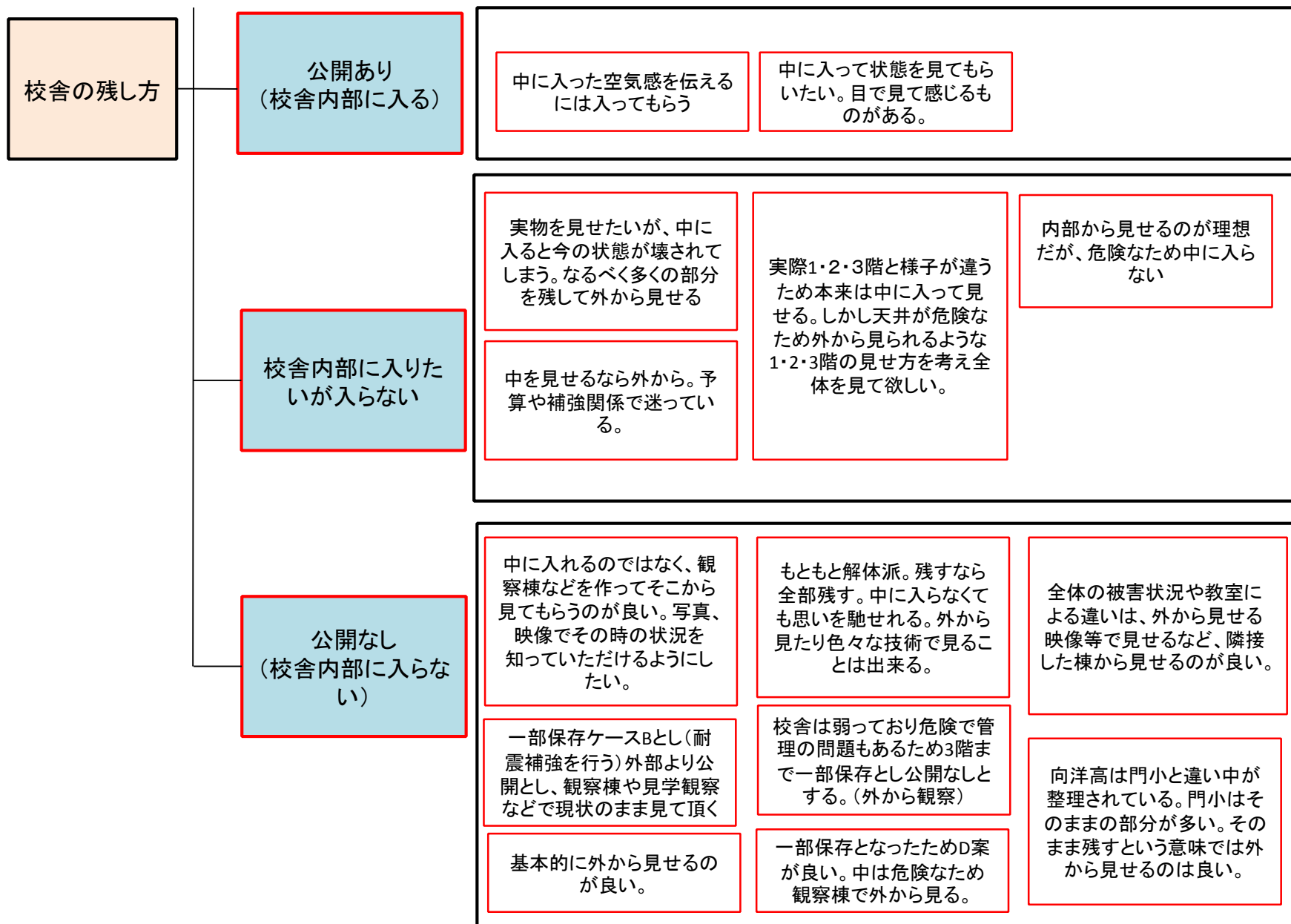
校舎の残し方

新しい施設の提案

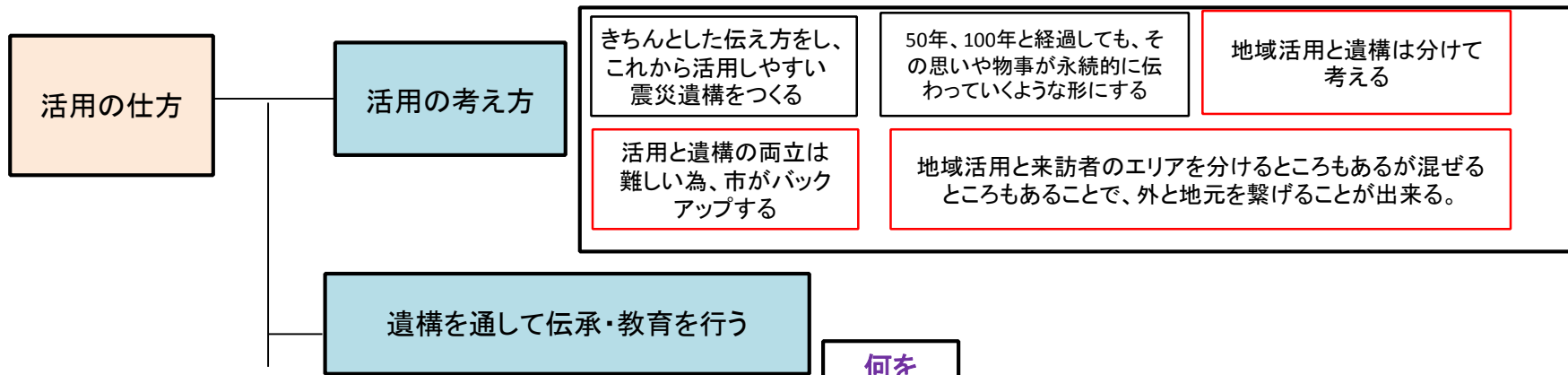
説明するための施設を設ける	写真館を併設する。	門脇小と資料館を併設して残し、映像を活用する
学校、保育所、教育施設を戻す	保育所、老人施設、野球・テニス・サッカーをする人達の宿泊施設、食事の提供施設を計画する。	
観察棟を設置する	歴史館を設ける	小野田先生の案のように、新しい建物を加えて使う観察棟という案とする
特別教室に子育て施設を設ける	保育所の移設なども踏まえ、利用者が望まれる子育て施設にする	

移設する(南浜祈念公園へ)

研修センターも兼ねて、大きな規模で南浜の祈念公園に移設する	区画整理で整備を進めている住宅地の中に遺構は必要ない。もし残すのであれば南浜公園内に津波の怖さ、悲惨さが残る1階部分を移設し、命を守るための学習施設と一体的に整備を図るべき
祈念公園に移設できないか詳細に示す	



2. 遺構の活用の仕方



きちんとした伝え方をし、これから活用しやすい震災遺構をつくる

50年、100年と経過しても、その思いや物事が永続的に伝わっていくような形にする

地域活用と遺構は分けて考える

活用と遺構の両立は難しい為、市がバックアップする

地域活用と来訪者のエリアを分けるところもあるが混ぜるところもあることで、外と地元を繋げることが出来る。

何を

津波の恐ろしさ	被害を最小限に食い止める努力	復旧・復興に向かう姿勢	地震・津波・火災に見舞われた唯一の校舎であり、津波火災の惨状をまざまざと見せつけている焼け焦げた校舎を、門小の避難行動と関連付けて伝える	門脇小学校の歴史は、地域とともに歩んだ日本の学校教育史そのものであり、これまでの歩みを語り継ぐ	「自分の命は自分で守ること」
当時の大変さを伝える	命を守るために人が出来ることを伝える	その地域の過去の災害歴史も伝える場とする	門小の避難行動、門小が取り組んできた防災教育から、早めに避難することの大切さや避難時における地域住民との協力・連携の大切さを伝える	「あの日 何が起きたのか」「その時学校はどう対応したのか」の事実・実相	石巻の津波火災の起きた背景(科学的実証)
震災で失われた人命の尊さ	類似災害が発生した場合の対処の仕方、身の守り方	”天災は忘れた時にやってくる”の教訓		広島原爆・神戸の大地震に対し、津波被害のあった石巻では「津波の恐ろしさ」を前面に出して訴える	震災を長く伝え、次の命を守る行動につなげてもらうために、思い切って「失敗」を伝承する
避難に成功した良い事案だけでなく、失敗した最悪な事案	津波火災は、人為的な消火がほとんど不可能であるという教訓を伝える	震災、火災、避難経路	背後に山が迫っているため漂流物の逃げ場がなく、独特の被害があったことを伝える	高台が近くにある場合は、建物ではなく高台に避難すべきという教訓	被災後に地域はどう改善されたのか
津波火災の危険性を伝える					避難行動としては校舎に避難したことは不適切であったこと
住宅地以外の場所で高台に逃げる					

遺構を通して伝承・教育を行う

誰に

被災地の地域の 人々に	被災地以外の地域の 人々に	来訪者に
未来の人々に	未来に生きる人たち・今 を生きる人たちに	石巻を訪れた 人々に
子どもたちに	今後、津波被害が懸念さ れる地域に	全国からの視 察研修を受け 入れる
未来の子供に しっかりと伝える 場所にする	初めてこの地区を訪れた 方々に	

どのようにして

門小に関心・興味 を持ち、見ただけ で何かを感じて 帰って頂けるような 遺構にする	日常的に思 い起こし、語 り継ぐことを 促すような遺 構にする	必ず立ち 寄って頂け るような遺 構にする	地域のまちづくりの妨げ ではなく、これからの地域 防災の拠点にする
震災について考え、 長く記憶にとどめ、 鎮魂につながるよ うな遺構にする	防災・減災 意識の醸成 を促すような 遺構にする	地域の魅力 向上、「場」 の記憶の掘 り起こしを行 う	「津波」の知識と対応を自 分事として知ってもらい、 「津波からは絶対に逃げ よう」と感じてもらえるよ うな工夫をする

活用の仕方

既存施設の活用

体育館と校舎活用について議論する	街開きなど地域のために体育館を使用する	後の校舎(三階建て)と体育館大・小二個を、地域の人々が盆踊りや運動会等を楽しめる様な有効利用をする	
体育館と後ろの校舎を利用する	体育館を活用する	グラウンドを活用する	グラウンドを地域のまちづくりのための施設、遺構施設利用者の利便性のために活用する
特別教室や体育館の関係性を考慮する	山際の校舎を解体し、広場や駐車場にする	旧体育館、小体育館は、耐震補強工事を行い、展示室、映像室、会議室、後援会等、遺構の保管施設として利用する	校庭を広場として残し、防災・減災訓練、避難訓練の体験場所として使用する
特別教室を活用する(子供たちが集まる施設として)	体育館を映像ルームとして利用する	体育館の地元利用を考慮する	内部公開する体育館は伝承館として活用
体育館の活用について、10年後の人口を考慮する。	体育館の耐震補強問題について議論する。	特別教室、校庭、体育館は地域の活動の場とする	校舎裏の導線(残す、残さない)について議論する
第二体育館を優先的に地域利用にする	特別教室、体育館大、小を含めて地域住民が活用する	特別教室は遺構の関連施設に、体育館は地域の施設という形で分ける	特別教室は校舎との関わりで展示やシアター機能を設ける
第二体育館にカフェや地域の集まる場とする	グラウンドはグラウンドとして使うのではなく、遺構の前の空間として考える。	特別教室に子育て施設を設ける	カフェ・お土産売り場を設け、人を行き交わせる
中心に捉える旧校舎との関連の中で考える	校庭とトラックは分断しない	体育館は公民館の機能を持たせて地域利用。	特別教室は本校舎と同一エリアとし遺構・歴史・教育・コミュニケーションの場とする

活用の仕方

既存施設の活用

<p>体育館は地域住民や他地区の方々も有効に活用できる施設として整備する(屋内運動場・イベント利用等)</p>	<p>特別教室棟に震災・防災に関するコーナーを設ける</p>	<p>子供たちを通じての防災活動を行うため、体育館に児童館を設置する</p>
<p>校庭については将来的に誰が維持管理するのかを明確にし、常に整然と美しい場所として遺構の表の顔として他に恥じない整備をする。</p>	<p>体育館は、見学者と地域の方々と伝承し、防災について語り合う、人との繋がりがある交流の場とする</p>	<p>特別教室は伝承の場として分けて考える</p>

地域の人々の交流・活動の場にする

<p>地域にとっておてんとうさまのようにありがたく感じるような遺構にする</p>	<p>町がにぎやかになるような遺構にする</p>	<p>地域活性化遺構として残し、支援の借りを返す</p>	<p>地域と連携し、複数の避難経路の検討・避難所運営・防災訓練を実施する</p>
<p>国立の慰霊塔を含め、活力のある次世紀に結びえる地域づくりにつながるような遺構にする</p>	<p>市民活動を入れる器を作る</p>	<p>「校庭」を地域の「防災訓練」の場として積極的に活用し、生活の一部として「行事化」する</p>	<p>「おらたる」のように、旧門小は、遺構として校舎教室棟のほか、北側の特別教室棟、東側の体育館・第2体育館も併せて、地域の人と来訪者との交流の場として活用する</p>
<p>校舎を部分的に残しつつ「人と防災未来センター」と地元の人々と語り合うコミュニティセンターを設置する</p>	<p>旧体育館・校庭を地元町内会に開放する</p>	<p>旧校舎付帯施設(体育館・第2体育館・特別教室校舎等)は地域住民が利活用できるようにする</p>	
<p>町内会の人々の利便性を考慮する。</p>	<p>特別教室を交流・地域コミュニティーとする</p>	<p>特別教室・体育館も十分に資料・公開の場として使い、その上で地域でも使っていく</p>	<p>遺構の付帯施設としてしっかり位置づけた上で、副次的に地域で使うというふうにする</p>
<p>日常でも寄れる場所にする</p>			

活用の仕方

慰霊・追悼の場をつくる

校庭で、火災により車の中で亡くなった方もいることを踏まえて考える

石巻での「献花」の機能は、祈る方向、花を手向ける方向等、2遺構、1公園ともに納得感の醸成が必要

「救えなかった命」に対して追悼行事を行う

石巻では追悼場所が複数になるので、それぞれが「誰を」対象とした追悼の場所なのか、個人名の扱いをどうするか等検討する

慰霊碑に名前を刻む。又は、広島のように中に名前を書き入れたものを納める

グラウンド等、津波で亡くなった方への追悼の意を示すため、近くにそのための場所を設置する

追悼空間の在り方については、建物以上に議論すべき

「国立広島原爆死没者追悼平和祈念館」のような、遺族はもとより、その子孫も死者を追悼出来る場を作る

門脇小学校区(門脇町、南浜町、雲雀野町内等)で亡くなった(学区内の方で亡くなった)方々の名前を刻んだ慰霊碑をつくる

日和幼稚園のバスが発見された場所を知らせる案内板の設置する

日和幼稚園のバスが発見された場所に献花台を設置する

防災教育の場にする

防災教育の場として活用する

防災教育として「逃げる」「生きる」を伝える

「自分で判断し行動する子」を育成する

計画的・実践的な防災教育を推進する。教育課程の中に位置付ける

青少年の防災教育に力を入れる

防災学習プログラムについて、学校関係者・地域住民の考え、市震災伝承検討会議で出された意見を勘案し決める

震災遺構と復興祈念公園で学ぶ防災学習プログラムの関連性を吟味する

ビニール袋を使った食事作りなどを地域の避難訓練に来た人に地域の人が教える。特別教室で教える。

防災訓練の場としてグラウンドは広くする

活用の仕方

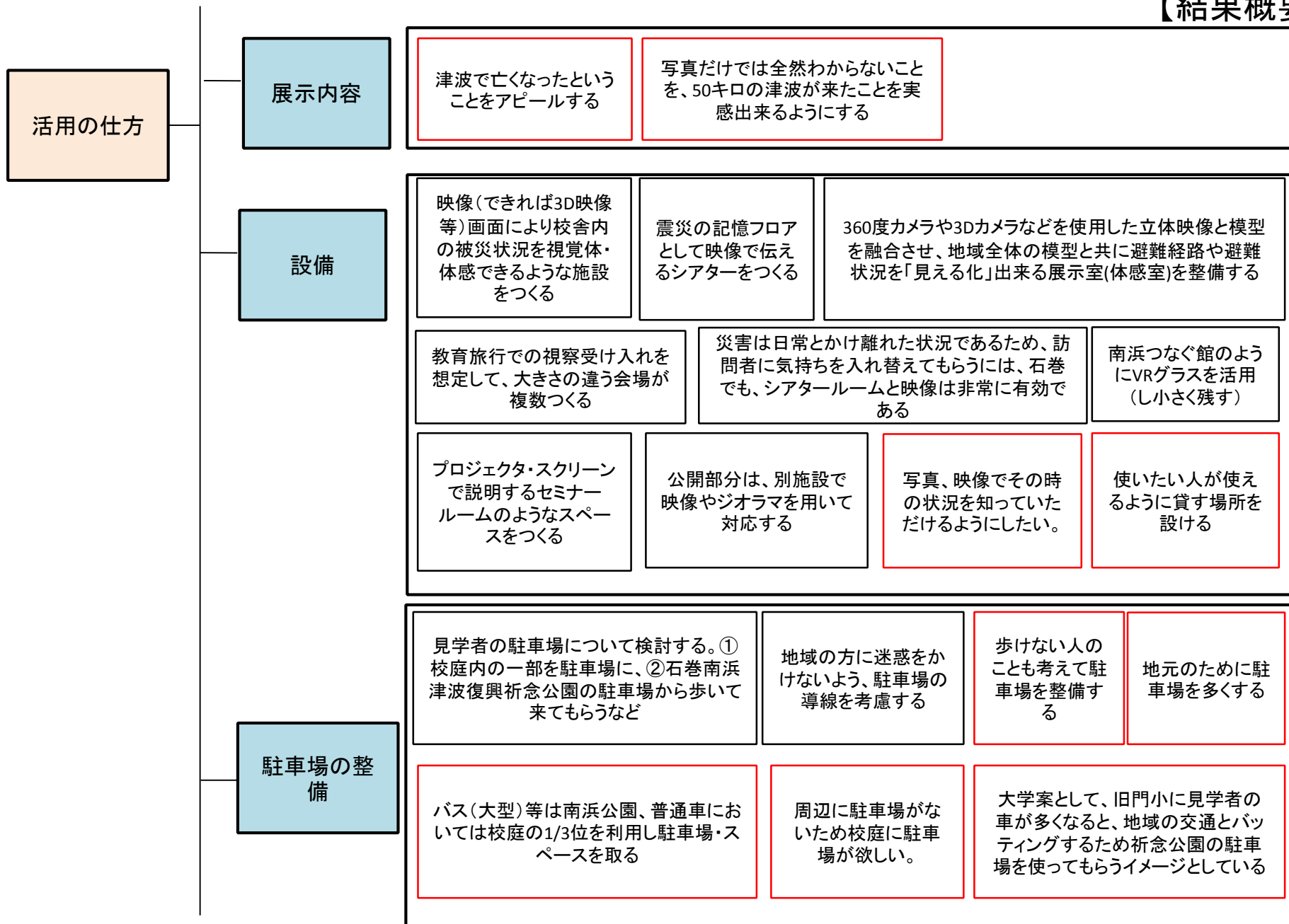
展示の考え方

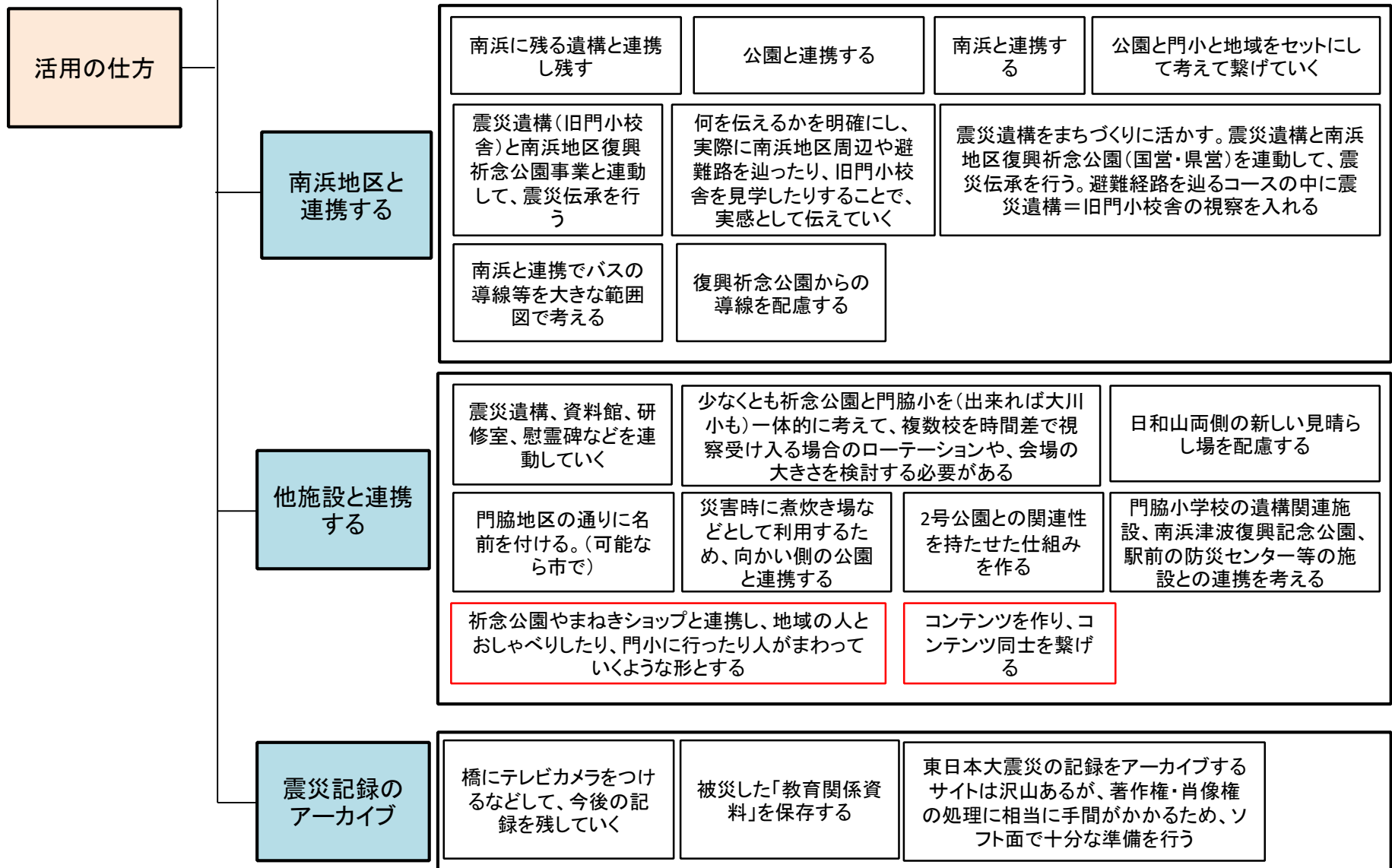
一般の人が撮った記録や写真を集めて展示する	映像を見たくないという人もいるので、写真で展示する	門小の資料室の規模に見合った効果的な展示の工夫をする	震災遺構には補足説明する資料館を併設する
「津波の被災者＝(避難できたはずなのに)大きな過ち」と正視して捉え、展示内容や伝承方法を検討する	広島を参考に資料館をつくる。例えば旧門小の特別教室を利用するなどして震災関係のものを網羅する	校舎内部の被災状況は周辺施設で伝える	「人と防災未来センター」の常設展示は資料が多すぎる。経験や教訓を分かりやすくする展示する
		「モノ」の展示にあたっては「数ではなく質(ストーリー)」を重視する	

展示内容

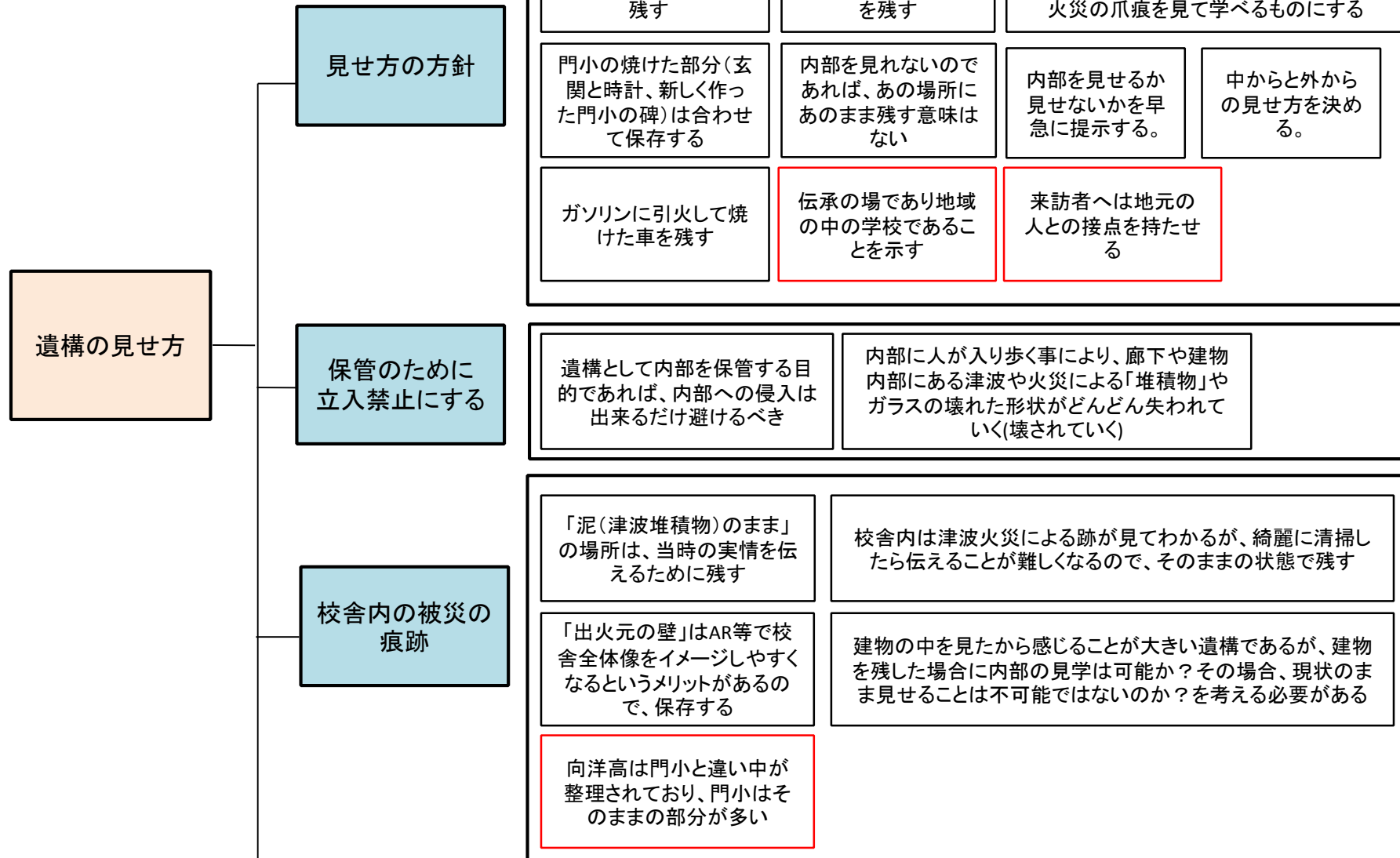
火災の時の状況の記録を展示する	門小は閉校したので、沿革を展示する施設も必要	震災の時の物(遺品等)を展示する資料館をつくる	耐火金庫の中で生き残った「学校沿革史」を紐解く。
周辺は新興住宅地かと思うように復興しているので、震災直後からの写真を展示する		校長室の防火金庫や3階の机や腰掛を当時の写真と一緒に展示する	特別教室の中に、門小の歴史や震災に関する資料を展示・掲示し、門小の歴史・地域の歴史・震災の被害状況を伝える場を設ける。
門脇小の伝統や歴史を見てもらう。(中に入るかどうか先に決めて議論する。)		修復中の二宮金次郎は、特別教室に戻せるなら戻す	
記録した写真・DVDを展示する(被災前・被災後)	逃げ遅れたケースも残す	被災当時の再現映像の記録を展示する	教室棟で光と音と映像で伝える
展示、体験、学習研究(防災も含む)、防災プログラム(ごはん・スूप)、テントの作り方	震災時の避難状況、一般市民の避難状況、火災になった状況	門小の校舎の時計が震災発生時刻で止まっていたのであれば、時計を再現して震災遺構として残す	家が流されながら燃えている写真等の展示。プラス家から出火の原因の説明
門脇小学校の歴史(校章・校歌・スローガン・門・二宮金次郎等)	津波が押し寄せた状況などを明記する展示コーナー	車が燃えている写真、車から出火している写真等の展示。プラス車から出火の原因の説明	プロパンガスボンベホースからのガス漏れ、爆発の状況等の写真の展示。プラスガスボンベの展示 爆発音の再現

赤枠: 第4回目に追加された意見





3. 遺構の見せ方



遺構の見せ方

整備内容

<p>中越のマンションの1室の被災後の部屋の状況の再現ブースのような見せ方をする</p>	<p>門小は、外からより校舎内を見ることが大事だと感じた。どのようにして順路を設けるか検討する</p>		
<p>残った2階の教室で「(上下左右)6面スクリーン」で、あの時を再現するシアタールームづくり、地震発生・避難・救助の様子を再現上映する</p>	<p>津波を実感してもらうために、「泥の堆積」「津波痕跡」と海が(出来れば市民活動拠点も)同時に目に入る形で確認できる視座を用意する</p>		
<p>東と西の違い、二階と三階の違い、どこからどう裏山に逃げたかを教壇のレプリカを配置し、できるだけ現状のままで見せる</p>	<p>神戸の東公園には灯りがあり地下にも水盤が使われている石巻には「水」の活用例はないが、空間を活かすために、「水」、「火」を効果的に活用する</p>		
<p>山茶花や桜の木の小道のように以前のことを想起できる樹木を整備する。今までのものを活かす。</p>	<p>二宮金次郎像を残す。</p>	<p>植栽などで目隠し、周辺環境と周辺住民へ配慮した計画とする</p>	
<p>校庭南側・・・桜の木 校庭西側・・・ポプラ 校庭東側・・・山茶花(赤・白)(『友情の小道』) 二宮金次郎の像 校庭南側中央部・・・正門跡(石段有) →校舎中央玄関前から正門跡の階段を 通って、復興祈念公園へ</p>	<p>構を中心として緑化計画を行う。(桜、モミジなど)。</p>	<p>校庭側からの見学通路を設ける</p>	
	<p>被災樹木を保存する</p>	<p>かつての校庭の雰囲気を感じられる環境整備とする</p>	
<p>門脇小学校を中心に左右がお墓で真っ暗。明るいイメージにするため周囲を緑で一杯にする</p>	<p>閉校碑についても残して記す</p>	<p>学校敷地両側が墓地になるので、植木等で(1.5m×2m)で目隠しをする</p>	
<p>保存ケースB案に側い両側が空き地になるため、境界線に草(花畑)木を植える</p>	<p>駐車場の前方(校舎)を植木等で遮断する。</p>	<p>グラウンドに花を植える</p>	<p>門小にかつて有った木を再現する</p>

4. 管理の仕方

管理の仕方

現在

立案が完成するまで、校舎や周辺の管理をする(ネズミの巣、虫、雑草、いたずら等)

体育館の左側の除草を行う

門脇小左側の除草を行う

学校とお寺の間を除草する

特別教室裏を除草する

計画策定・運用

神戸・中越・広島など、先人の取り組みを参加者で視察をし、今後数十年間を見据えた維持管理計画を立てる

計画だけを作ってその後は全部お任せとならないように、会議後も参加者の意見を取り入れる

管理運営の人材育成、体制づくり

維持費がかかるようであれば、有料公開(徴収)にする

洗練された専門性と信念をもった施設運営が不可欠

地元民による「維持管理」を考える

伝承をすすめるためには組織化する

大川・門脇・復興祈念公園・追悼や伝承をすべて担当する行政の組織、あと5年で体制を作り上げるための専門的人材が欠かせない

神戸の反省から、ICTをより有効活用した展示ができるよう、訪問者やスタッフの意見を柔軟に取り入れる仕組みをつくる

残された施設の真意を伝えるには、語りの高度な専門性と道具立てが不可欠。語り部を養成するとともに、運営方法を検討する

住民が将来に伝える強い思いを持ち、それを形にするための組織が必要

継続性のある伝承のためには、物より人、組織を大切にする

震災遺構として遺す旧門脇小校舎と大川小旧校舎には語り部が常駐する

広島・神戸ではリアルな経験者の話の深さと決意を感じることができた。伝える人材が一番大切であり、語り継ぐ次の世代も育てていく

準備及び運営・管理に向けてプロジェクトチームを組織する

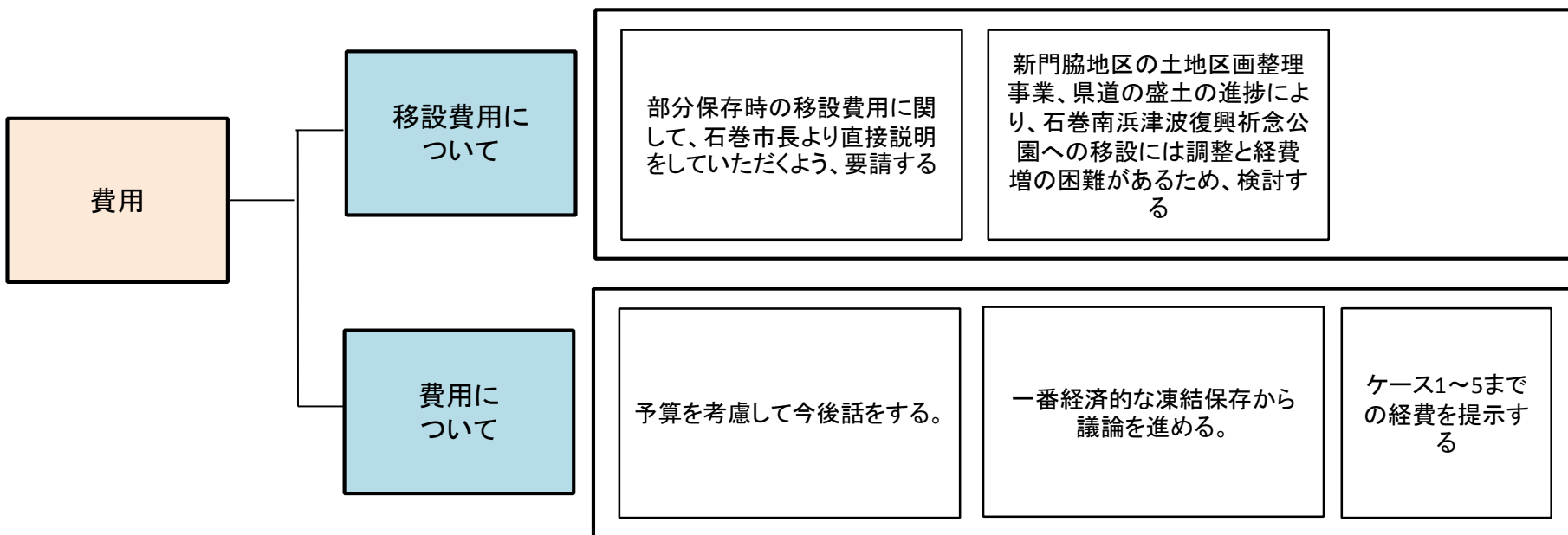
地域住民の関わり方

「中越メモリアル回廊」に学び、地元の要望も受けながら、思い切って地元任せ、行政が側面的にバックアップを行う。地元の人たちで運営することで地域の活性化・雇用創出にもつながり、地域としての責任と自覚も育まれる

公園ガイド、施設ガイド、語り部、公園の草花の世話・・・など、様々な市民の関わりがあり得る。予算削減の観点からも、計画段階から各レベルの住民参画の必要性と、その構築支援を想定しながら進める

復興祈念公園の計画では既に市民活動の重要性が位置づけられているが、遺構の整備計画策定にあっても、実際に伝承活動の担い手となる地域の町内会や団体の参画が得られる形とする

5. 費用について



6. スケジュール

